

北スラウェシ日本人会 NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス



平成23年/月

第20号(平成23年1月) 目 次

1	新年のご挨拶	大之:	木英雄	2
2°	セレベス民政部時代の思い出 (2)	栗竹	章二	3
3.	エチオピアについて(その5)	石野	赤	18
4.	・ 幻の滑走路をたずねて	坂本	裕保	20
5.	ミナハサの皆さんとの友好交流	川口	博康	23
6.	尖閣諸島	長崎	節夫	29
7.	日系人雑記	長崎	節夫	33
8.	会員動向	j	編集部	34
9	編集後記			35
10.	広告のページ			37
1 1	会員名籏			38

新年のご挨拶

マネンボネンボ慰霊碑建立責任者 (元)海軍第十四期飛行専修予備学生 元山戦闘機隊代表

大之木 英 雄

ビトン日本人会のみなさま、2011 年(平成 23 年、皇紀 2671 年)の新春おめでとうございます。新しい年が皆様にとりまして何よりも平和で幸せな一年になりますよう心より願っております。

平素、私共の建てさせて戴いたマネンボネンボ村の慰霊碑につきましては、皆様方の一方ならぬ御配慮、御厚志により立派に存続しておりますこと、ただただ感謝のひとことでございます。祭祀されておられます南太平洋戦域の戦没陸海将兵も恐らく心安らかに御眠り戴いていると思っております。

昨年の祖国日本は誠に閉塞感そのもの、将来性の乏しい衰退国家と位置付けられた一年でございましたが、その中にあって、鈴木、根岸両教授のノーベル化学賞の受賞と小惑星探査機"はやぶさ"が見事任務達成、無事帰還したというビックニュース、それと広島市出身の荻原麻未さんがジュネーブの国際コンクールで8年ぶりという難関を突破してピアノ部門で優勝し世界一の栄を掴んだという嬉しいニュース・・・科学と芸術の分野で打ち立てられたこの三つの金字塔のニュース程、日本人の心に希望と勇気を与えてくれたものは無いと思われます。

新しい年 2011 年は科学、芸術は勿論のこと、経済、外交、国防、その他あらゆる面に おいて"活力に満ちた日本"の建設に立向かっていきたいものです。

体力のある内に一度慰霊碑や日本人墓地に参拝、併せて御挨拶に上りたいものと思って ・ おります。

皆様の御多幸を祈念しご挨拶とさせて戴きます。

セレベス民政部時代の思い出(2)

粟竹章二

マカッサルのレジャーと訓練

昭和19年6,7月頃のマカッサルは、それは天国でした。空襲もなく、毎日夕方になると課長以下皆で自転車に乗って、世界三大サンセットといわれる美しいロサリ海岸の落日を見に行きました。

西の水平線に太陽が沈むと、夕闇の中の所どころにあるラジオ塔から甘いクロンチョンのメロディがながれ、涼しいそよ風に吹かれながら家路をたどるのは、戦争を忘れるような素敵な気分でした。また、休みの日は皆でロッテルダムの前のプールに行き泳ぎました。プールの帰りに喫茶店の二幸や清月堂に寄りまして甘いものを食べるのがとても楽しみでした。また、三笠会館では映画や催し物がよくあり、内地からの芸能慰問団の公演や音楽の夕べなどたのしみにしていました。

藤山一郎さんにインドネシアの歌謡指導を受け、国歌のインドネシアラヤやブンガワンソロなどを教えていただきましたのも三笠会館でした。南星座にもよく映画を見に行きましたが、現地の人と一緒で南京虫にくわれるので、座席にはすわらないように立って観ておりました。 休日にはいろいろなスポーツの大会もあり、バトミントンやテニス、卓球などの大会もやり

まして、湯浅さんの指示で酒保から賞品など提供して大会を盛り上げました。

卓球大会では藤野さんはとても強くて男子選手をバタバタと負かし、賞品のビールなど貰ってきて応援の我々に飲ませてくれました。自転車の遠乗りも楽しい思い出で、皆でスングミナサやマロスの方まで行きまして、帰りに中華料理を食べるのが最高の楽しみでした。

しかしこのような優雅な生活も、昭和 20 年に入ると空襲が始まって、のんきなことはしていられなくなりました。

休みの日を利用して軍刀術などの実戦的な訓練もはじまりました。ある日、斉藤甲板士官が 我々若い理事生たちのストレスを発散させるために、収穫済みのバナナ畑をかいきりまして、 思う存分軍刀で切りまわしました。太いバナナの幹を袈裟切りにバサリと切るのはとてもよい 気分で、調子にのって切りまくり、人間もこのように切れるのかとよい気分になっておりまし たが、帰宅後刀の手入れを怠るとバナナのアクで刀身がべとべとに錆びついて、刀が抜けなく なり大騒ぎになりました。私はいち早く刀身を石鹸で洗い、打ち粉を打っておいたので事なき を得ましたが、そのままにしていた者はあとで大騒ぎになりました。

軍刀術では、剣道有段者の斉藤大尉に仕込まれましたが、これはなかなか大変な修行で、あの重たい刀で素振りを行うとき、振り下ろした刀を止めるのが至難の技で、10回もやれば腕が痛くなり息も切れてきます。一度は、振り下ろした軍刀の重みを止めきれずに履いていた半長靴の先に切っ先が突き刺さって、もう少しで足の指を切ってしまうところでした。昔の戦国時代の武将があの刀を振り回したのはよほどの力持ちだったのでしょうが、今でもテレビの時代物を見ると、刀を振り回しバッタバッタと人を切る場面など空々しく、しらけた気分で見ております。

昭和 20 年 3 月頃、セレベス新聞(毎日新聞系)がインドネシア青年のために滑空機(グラ

イダー)を内地から取り寄せて、マルチャヤ広場で師範学校の生徒に教えていました。当初、航空隊の若い士官を教官としてやっておりましたが、前線出動のために滑空士免状をもっている山田教員が代わりの教官をつとめることになりました。山田教員の助手を探しているということを課長が聞きまして、「うちの粟竹が資格をもっている」ということで私が金・土の午後に ** 訓練助手をつとめることになりました。

山田教員に会うと、「教えたくも教典もなにもない」というので、私が何かの役にたつかと思い「中等学校滑空士訓練要綱」という教典を見せると、「これで訓練ができる」とよろこばれました。私は早速ヨピーの協力を求め、残業をして教典をインドネシア語に翻訳いたしました。丁度、滑空機の型も文部省型1号というプライマリー(初級機)の新しい型であったので、教典がそのまま使えて簡単でした。ヨピーはものすごい才能を発揮して、私が教典を読むのを翻訳しながらタイプで打ち、3日ほどで大体の教典ができあがって、さっそくガリ版で刷って皆に配りました。

訓練の号令は全部日本語を使いますが、元より秀才ばかりがあつまっている学生達ですからたちまち上達して、その進歩はすばらしいものでした。生徒たちは私と年齢はかわらないのに私のことを「教官、教官」と呼び、とてもよく教えを聞いてくれました。

空襲が次第に激しくなって訓練も予定どおりこなすのが難しくなっていきまして、ついに師 範学校そのものがワタンポネに疎開することになって、滑空機訓練も中断となったのは残念な ことでした。

この訓練のことでは後にとても奇遇なことがありました。2001年に戦友会の宮本さんのお誘いで、元ハサヌディン大学の学長で現イラン大使のバスリ閣下のご子息の結婚式にご招待を受けて、ブギス式の三日間にわたる絢爛豪華な結婚式に参列いたしました。

初日の「バッチンの式」のときに、バスリ閣下のお父様か奥さんのお父様かよくわかりませんが私と同年輩の方が私の顔をしげしげと見て、「昔どこかで見たおぼえがある」といわれました。いろいろと話を聞いてみるとマカッサル師範学校の卒業生で、在学中にグライダーの訓練を受けたといわれ、「私も一緒にやった」と言ったら、「やっぱりあのときの教官だ」と60年ぶりの奇跡的な再会におどろき、昔話に華が咲きました。

現地召集・スングミナサ兵舎入隊

昭和20年5月頃から始まった現地召集も2次、3次と続き、同僚が次々と召集されていきました。民政部では各宿舎に分散していた理事生を鎌倉通りと高砂通りの角の宿舎に集合させて、男子宿舎として合宿させました。

その頃、マカッサル研究所がスラバヤに移転して、多くの職員が民政部に統合されて役所に 来ました。主計課にも多数入りまして新しい友人がふえました。

男子宿舎での生活は仮住まいのようなものでしたが、皆で遊びにいったりバドミントンをしたりして楽しみました。しかし、徐々に召集されて人数も少なくなってきました。女子理事生たちも地方に疎開して最小限度の要員だけマカッサルに残り、寂しくなってきました。

斉藤大尉も軍司令部の傘下にはいり、ワタンポネ派遣隊長としてボネに赴任いたしました。 酒保の仕事もほとんど開店休業で、たまの配給もヨピーにまかせ、もっぱらマリノに物資を運 ぶ仕事にかかわりました。

民政部もついに各進出商社の戦時下事業接収に踏み切り、政務部長を本部長として小笠原課 長や湯浅大尉などが中心となって大事業がはじまりました。

7月下旬、遂に私にも召集令がきました。第5次の召集で、8月1日に入隊とのことでし

それからはヨピーと酒保の残品の整理や資産の整理で忙しい毎日を送りました。配給物資はま だ来るので幾許かの資金を残し、残金は臨時軍事費に納入して、あとのことはヨピーに頼みま した。

ョピーは別れの時、私にお祖母さんの形見のウイルヘルミナ女王の金貨をくれまして、「万が一のときに役立てて」と、涙をながして無事を祈ってくれました。この金貨は終戦後マリンプンからの引き揚げの際、貴金属の携帯は厳罰とのことで、石鹸に埋め込みましてマリンプンに埋めてきましたが、本当にヨピーにすまないことをしたと今でも悔やまれます。私もヨピーに兄からもらった洋服地や入隊に不要な物など多くの私物を差し上げましたが、物資が少なくなっていたときなのでとても喜ばれました。ヨピーの大事な宝物をもらって私の全財産を差し上げても足りないと思い感謝いたしております。

8月1日に入隊いたしますと、同期入隊者にほとんど若い者はおらず40歳以上の者が多く、 私の分隊約20名のうち銃を使った教練を行ったことのある者は、私と工作隊からきた22歳 の男の二人だけでした。

分隊長は予備役の下上官、班長は大陸で戦った歴戦の勇士で、体いっぱいにクリカラモンモンの刺青をしたやくざの親分みたいな人でした。この班長がいばって分隊を仕切っておりました。訓練のときは私たち若手二人が中心になってすべてをこなしました。二人は親分に可愛がられ、「アワさん、ナカさん」と飯上げ掃除など一切の内務班の仕事などしないで、古参兵なみに下にも置かない待遇で上座に座り、ご飯やおかずの盛りもよく最高の気分でした。洗濯ものは課長のところのジョンゴスが毎日自転車でとりにきてくれました。塀のところで「トアン栗竹」と呼ぶのでそこへ行くと、袋に入れた洗濯済みの服と菓子、果物など持ってきてくれました。私はそのときはもう止めていて吸いませんでしたがタバコなどもあって、皆にさしあげると喜ばれてますます顔がよくなりました。あとで聞きましたがすべて湯浅さんの指図でやってくれたとのことで、有難くて涙が出ました。

訓練は人一倍やりましたが、それ以外は何もやらないので居心地がよく、入営中皆はこぼしておりましたが私は天国にいる気分でした。

訓練も10日ほどたちましてから、朝礼のときに「栗竹二年兵」と呼び出されました。悪い事をした覚えはないのに何事だろうかと思って前に出ますと、「ワタンポネ派遺隊勤務を命ず。 直ちに出向せよ」と、思いもよらない辞令がでました。

さっそく皆に別れをいいまして、荷物をまとめ、マカッサル行きの交通車に乗って役所へ行きますと、皆おどろいて「どうしたの」と聞かれました。当時、一課長を兼務しておりました小笠原課長のところに行き軍隊式に申告を致しましたらにこにこして、「斉藤が呼んだのだ。ボネで新しい仕事があるから一所懸命やりなさい」と言われました。湯浅大尉には「お前が入隊するときから斉藤と藤井が話しをして決まっていたことだから期待を裏切らないようにがんばりなさい」と言われ、何事かなと、期待半分不安半分の気持ちで、その晩は課長の官舎に泊まり、翌日主計課の皆さんに別れを言ってワタンポネに行く車に便乗して出発しました。

出発のとき主計課の皆さんがヨピーと二人きりにさせようと気をつかいましたが、ヨピーが 照れてわざと私を避けるようにしていたのが思い出されます。遂に彼女に声もかけずに出発し ましたが、あとで課長から「あのときヨピーは泣いていたのだよ」と聞かされ、たった1年半 くらいの付き合いで、恋とか愛とか言うのとは違う、深い友情で結ばれていたのだと思います。 戦後何度か、アンボンにいるというヨピーに手紙を出しましたが、音信不通のまま今日に至り ました。

ワタンポネ派遺隊

昭和20年8月12日、ベンゴー峠、ネンゴー峠を越えましてワタンポネに到着いたしました。ワタンポネは南セレベスでも一番の親日家であるボネの酋長のお膝元で、気候がよく農作物に恵まれ、海に面していて海産物も豊富で、人心も穏やかで住民は親日的で我々の第一の味方でした。

民政部では早くよりこの地域を民政部の疎開先と定めて手を打っていました。大物の地方課長である髙橋司政官を県監理官として送り込んで首長家との折衝に当たらせ、敏腕の渡辺警部を分置監理官として人心の掌握に努め、大尉クラスの大物の派遣隊長を置きまして大いに王家との親睦につとめました。

民政部では、すでに王家の広大な所有地に疎開職員の宿舎建設など青写真ができており、すでに土木課の技師職員は現地入りを済ませて準備段階に入っていました。斉藤大尉は私にその建設の仕事の一端をさせるべく、髙橋監理官や渡辺監理官に進言してこの結果になったとのことでした。

派遣隊に到着いたしますと、斉藤大尉がにこにこして「ご苦労さん、待っていたよ」と出迎えてくれました。

派遣隊には最初からいたという准士官がいて、先任下士官以下、兵曹、上等水兵、一等水兵など歴戦の勇士がそろい、私は最下位の二等兵でまことに居心地が悪く、しかも隊長はあとから乗り込んできた主計課(兵科でなく)士官で、そのお声がかりの私としては座る場所もなくウロウロしておりましたら、皆さん親切で、まるで特別の民間人あつかいで受け入れてくれました。そのはかに、20名くらいの兵補(インドネシア人兵隊)がおりました。

食事のときも先任の兵長がお給仕してくれるので私がやろうとすると、「いいから座っていなさい」とまるでお客様扱いです。呼ぶときも、隊長や兵曹長の前では「栗竹」と呼びますが、 そうでないときは「栗竹さん、栗竹さん」と呼ぶので本当に困りました。

翌日、斉藤派遣隊長に連れられて監理官事務所に挨拶に行きました。マカッサルの役所では四課長で顔見知りの高橋監理官は「よく来たね、ごくろうさん」と迎えてくれました。そこにマランでお世話になった大田原書記が秘書官としておられましたので驚いて再会を喜びました。その後分遣監理官事務所に行きまして渡辺警部にご挨拶いたしました。渡辺警部は初対面で、とても豪快な、柔道で鍛えたいかにも警察官らしいこわい感じの人でしたが、話すととてもやさしく山形弁でニコニコと「明日から教えることがたくさんあるからカントル(事務所)にくるように」と言われました。

派遣隊では何をすればよいのやら分からないのでウロウロとしておりました。何か手を出すと性が「いいからいいから」とさせてくれないので弱りました。それならばと渡辺監理官のところに行きまして、ブギス族の習慣や首長王家のことなどを教わりました。また簡単なブギス語など教わり、できるだけ土語で話し早く土地になじむようにと教えられました。

渡辺さんは日常、サロンとバジュとソンコのブギス族の服装で役所に勤め、インドネシア語がとても流暢で特に土語のブギス語が堪能でした。職員とも全部ブギス語で話すので現地の人の信頼も非常に高く、人気がありました。終戦後の抑留地のマリンプンでも同じ宿舎になり、とてもかわいがっていただきました。帰国後は山形県警本部長を務められ、退職後はお寺の住職として仏門につかえた人格者です。

ワタンポネ病院の院長として八課長(衛生課長)の松井司政官が居られ、他に看護婦長の阿

部さんなど顔見知りが大勢いました。特に教員の田崎和子さんがいたのはとても心強く、後に 田崎さんとボネ県下の村々を回ったのは良い思い出になりました。

派遣隊にもようやく馴れた3日目に「ボネ在住の日本人は派遣隊電信所に集まるように」との指示で、皆近くの電信所に行きましたら、「これから重大放送」あるから」と言われ、何事かと思って聞き耳をたてましたが、ガヤガヤと雑音が聞こえて内容はよくわかりませんでした。それでも前にいた陸軍の将校が嗚咽を堪えていたので、これはきっと戦争が終わったのだなと思っていたら、斉藤大尉から「ただいま終戦の大詔が報じられました。各自持ち場に帰り、冷静沈着に行動するように」と訓示がありました。私は「嗚呼、遂に終わったか。これからどうなるだろうか」と案外冷静にしておりました。

その夜、斉藤隊長は兵補以外の全員を集め、「くれぐれも軽挙盲動を慎むように」と訓示されました。

兵補たちは早くから情報を得ていたらしく、いつの間にか姿が消えて「ムルデカ、ムルデカ (独立だ、独立のときがきた)」と騒ぎが聞こえました。

16日からは司令部の指示により武器の管理などの命令が次々と来て忙しくなりましたが、 皆案外落ち着いていて、整理が終わるとする事もないので非番の者達で武器庫から銃を持ち出 し、近くの湖に鴨撃ちにでかけたり、現地製のビンの爆雷を持って魚とりに行きました。 鴨撃 ちは猟銃の他オランダ製のベルクマンという小型機関銃を持っていきました。

ベルクマンは丸い弾倉に拳銃弾くらいの大きさの弾を50発ほど弾帯に詰め、映画にでてくるアメリカのギャングのように腰弾射撃でバラバラと空にむけて撃ちましたが、ちっとも当たりませんでした。続けて撃つとすぐに銃身が焼けてよくやけどをしました。

爆雷は、タバコの火をつけて海に投げますと、海中で爆発して魚がたくさん浮いてきてすぐに沈みはじめ、近くにいるネシアの人にとってきてもらいますが、持って帰って料理してもらいますと身がフニャフニャして綿みたいで不味くて食べられませんでした。

そんなことをしているうちに、渡辺さんからブラブラしているなら手伝いに来い、と雑用を言い付かり、在住日本人との連絡などの仕事をいたしました。

そのうちに民政部のボネの宿舎の建設もはじまり、土木課の皆さんや建設に従事する方々が増え始めました。8月末ごろに渡辺さんと斉藤さんと3人で私の運転でボネ県下の視察旅行に行き、各地の分遣監理官に建築資材の提供を依頼してまわりました。

その間兵補たちが不穏の様子で、斉藤隊長に武器の提供を迫ったりして情勢があやしくなったので、武器の管理を厳重にして弾薬は別のところに隠したりしました。武器庫の中の日本軍の武器は97式重機関銃がいちばん大きく、99式小銃も隊員の数には足りず、あとは全部オランダ製の戦利品でした。台帳もあまり正確ではなく、私の勘ぐりですがたぶん戦利品の武器のほとんどは兵補に渡したのではないかと思っています。一度斉藤さんに確かめてみようと思っておりましたが遂にその機会はありませんでした。

ワタンポネでの終戦

そのうち斉藤隊長より田崎教員といっしょにボネ県下をまわって先に頼んだ宿舎の建築資材 提供の宣撫工作をするようにと命令が降りました。 一行は私、田崎さん、田崎さんの同僚で中国系インドネシアの女の先生、ワタンポネ病院の男の薬剤師さん(お名前失念)で、フォードの小型車に先生二人と私の3人、もう1台の小型トラックに薬剤師さんとネシアの運転手が荷物を満載して出発しました。

監理官事務所から連絡が行っておりますので行き先のカンポン(村)ではたくさんの村人が 集まっており、私がハーモニカを吹いて、歌の上手な田崎さんが日本の歌やインドネシアの歌 を歌い、集まった子供たちと簡単な遊戯などをしました。薬剤師さんが村の病人達に薬を配る とたいへんな人だかりで大盛況でした。

薬剤師さんの話によりますと、薬など飲んだことのない村民は、何の病気でも仁丹3粒で治ってしまい、潰瘍や傷、やけどなどにはヨーチンやオゾを塗っておくとすぐに治ってしまうとのことで、長い列ができて大評判でした。キニーネはさすがに貴重品なので日本人向けに少量もっていきましたが、マラリアで重態の村長夫人にあげたらたちまち治ってしまったと、その効果はすばらしいものでした。

夜はパッサングラハン(簡易旅館)に泊まり、食事は監理官官舎でご馳走になりました。と きには村長のお宅に招かれてバナナの葉っぱに盛られた料理を手でつまんで食べました。翌日 はもう次の村では噂を聞いて準備して待っている次第で、どうせ持っていても占領軍に持って いかれるなら皆に配ってしまおうと、気前よく宣撫用のサロンやバジュなどを配りました。

一番人気は田崎さんの歌でその次は薬の配布でした。私も懸命にハーモニカを吹きインドネシアの歌を歌いまして、下手なブギス語で話すと大喝采でした。

この時期、すでに各地で独立運動の兆しが見え始め、それに便乗した盗賊の活動などの情報が入ってきましたので、斉藤隊長は田崎さんはじめ皆の安全をまもるため私に拳銃の携帯を命じて、戦利品のコルトの弾倉回転式6連発の小型拳銃を持たせました。そんなもので安全を守れるとは思いませんでしたが、気休めに面白がって野鳥などパンパンと撃ちまくり、田崎さんに叱られました。

宣撫工作は1週間の予定でしたが、品物があまったのでもう少し回ろうと予定を伸ばしましたら、斉藤隊長が心配して途中まで迎えにきてくれました。斉藤隊長は何も言いませんでしたが、あとで渡辺さんがとても心配して夜も満足に寝ていなかったと聞かされ、調子にのって勝手なことを致し申しわけなかったと心の中でお詫びしました。

あの宣撫工作が効いたのか、建築資材はどんどん集まり建設もはかどりました。

9月に入ってマカッサルからワタンポネに人員が次々と移って参り、進駐軍の豪州軍もやってきました。派遣隊は解散して、皆さんは原隊に復帰いたし、豪州軍による武器の接収もはじまりました。私の軍刀も供出しましたが短刀だけは隠しておきました。

私は派遣隊を引き払って新しくできた宿舎に移り、興南組から来た川崎氏と二人で新しくきた物品の番人を致すことになりました。川崎氏は元相撲取りで体格がよく腕力にも優れてまことに頼もしい相棒でした。

彼の子分のヤンパーという若者が我々の世話をしてくれました。このヤンパーが実に良く働き、よく気がきいて料理もうまいのでとても助かりました。川崎氏はなかなかの社交家で首長の甥とも仲良く、時々食事に招待されました。

川崎氏と留守番していたある日、マカッサルから運んできたトランク一杯の銀貨を我々の寝室の前の庭に埋めまして、これならば大丈夫、と安心しておりましたらある朝みると庭に大きな穴が開いて見事にトランクが消えていました。その前にもマカッサルより運ばれてきた職員のトランクが泥棒に盗られる事件があって警戒している矢先にやられまして、莫大な金額なので斉藤隊長に申し訳ないと報告いたしましたら、「相手が泥棒ではしかたがない。寝首をかかれて命をとられるよりましだ。責任は私がとる」と言ってくれました。しかし、トランクを埋め

たときは私と川崎氏、ヤンパー、主計課の今井氏、川崎氏の5人だけで、穴も1m以上も深く掘ったので簡単には掘り返せないはずなのに、どうして盗られたのかと疑問に思いましたが未だに真相はわかりません。

そのうち、川崎氏はヤンパーを連れて興南組に帰りました。私はヤンパーに世話になった御礼に、彼が欲しがっていた短刀をどうせもってはいられないからと差し上げました。ヤンパーはとても喜んで、「トアンカチャマタの記念に大事にいたします」と名残を惜しみました。

マカッサルから民政部の職員たちがワタンポネに次々と到着して賑やかになり、楽しい集団 生活がはじまりました。市内には豪州軍もどんどん増えて我々のキャンプにも時々入ってきま した。豪州軍の将校は一応紳士できれいな英語を話しますが、兵隊はろくに教育を受けていな いのかものすごい訛りのある英語でさっぱりわかりませんでした。また、何を見てもすぐに欲 しがり、時計や万年筆をみつけると半ば強奪されました。私もジャカルタで兄に貰ったシーマ ーの腕時計を奪られて、いつか仇を討ってやろうと思っていたら遂にその機会がありました。

ボネに滞在中、我々の行動は自由で好き勝手に街にあそびに行きました。ちょうど、給料から天引きして貯めていた軍事郵便の貯金が全額払い戻しになり、大金が手に入りました。軍票は持っていても紙切れになって使えなくなるのだからと、皆さんを引き連れて勝手知ったるワタンポネの街を案内し、街はずれの、汚いが味は絶品という中華料理の店で毎日毎晩大宴会で、次第に仲間も増えて店は貸切となり、旨いものを腹いっぱいたべて最後に消化のよいパパイヤを食べ、約30分の道のりをキャンプまで歩いて帰りました。

店で食べ終わって帰るときに、子豚の丸焼きとかアヒル、ニワトリ、魚料理など翌日のメニューを注文するのでオヤジは盆と正月が一緒にきたような大喜びで、家族4人では間に合わず 手伝いまで雇って大繁盛でした。

皆さんのお金がなくなるまでは大分の日時がかかり、おかげでマリンプンに移動するまでの 1ヶ月くらいの間に私は丸々と肥り栄養を蓄えることができまして、抑留中の健康維持に役立 ちました。

ある日ワタンポネの街を歩いていると5,6人の豪州兵に囲まれました。その中に私の時計を奪ったべつがいるのでヤバイと思っていましたら、何か早日でしゃべりますが意味が通じないで困っていますと、しまいには卑猥なジェスチャーでネシアの女の人を指差したので意味を察しました。その手の女の人を探してくれと言っているようです。その点は渡辺監理官に街の隅々まで教えてもらった実績がありますので、OK、と下町の Jalan P(ジャランピー)と呼ばれている街娼のたむろしている場所に連れて行きました。街娼たちは豪州兵の姿をみて怖がり逃げ出そうとしたので、私が「ヘイ、マックンライ ロッカコマイ アジャマ シリシリ 間ガッテコ (はい娘さんたち、恥ずかしがらずにこっちへおいでよ)」とブギス語で呼び止めて交渉役も受け持つことになりました。通常相場は1 μ -ですが時計の仇を打たなくてはならないので、「一人 μ -で話をつけてやったから」と金を渡したらとても喜び感謝されました。余り褒められる行為ではありませんが、少しは時計の仇を打ったと思っておりましたら翌日もまたその次の日も彼等に捕まり、段々と人数も増えましてお得意さんになり、彼女たちも私を頼りにいたしましてすっかりポン引き屋になってしまいました。

その勢いで「中華屋の勘定はまかせておけ」などと皆さんに奢ってあげるようになり、皆に「ブギス語を習ってほんとに役にたったね」などと言われました。

ある日、街を車で走っていると、あの時計野郎がおかしな歩き方をしているのでよく見ていると、彼は性病にかかって病院に行くところでした。もし兄が死んでいたら形見にもなる時計を奪った報いだと、やっと仇がとれた気がして、翌日からもうその場所に行かないようにしました。

10月に入って、マカッサルから占領軍との引継ぎなどの仕事を終えた方たちがやってきまして、湯浅さんも私が残してきたトランクに私物を詰めて持ってきてくれました。ワタンポネの宿舎は上木課の技師さんたちがご自慢の建築で、資材は竹とニッパですが設計が素晴らしく、トイレなども手動ですが水洗で、とてもよくできていました。しかし10月半ば頃、突然連合軍より南セレベスの日本人は全員マリンプンに集結せよとの命令がでました。

この命令には驚きました。マリンプンといえば先の第一次大戦のとき、ドイツ兵の捕虜が収 容されましたがほとんど死に絶え、また、ジャワから来た移民も全滅した「死の草原」といわ れた場所でした。これは人変なことになったと思いました。

せっかくワタンポネに楽園を建設したのに、それを捨てて行くのは残念だし、また、マカッサルその他の各地から集結してきた人たちや膨大な物資のマリンプンへの輸送など大問題が発生いたし、その日から輸送本部が設置されてまず手始めにマリンプンの収容所建設の人数を送ることになりました。

私は輸送隊に所属して物資の搬送に携わることになりました。マリンプンへはワタンポネからポンパヌア経由でワタンソッペンへ行き、西岸側にあるパンカジェネを経てマリンプンに入りました。ワタンポネを夕方出発して徹夜で走り、明け方マリンプンに到着する行程で、運転手2名と警備員1名の3名のチームでした。

何度目かの時、夜盗に陸軍の輸送隊が襲われて死傷者がでたというニュースが入り緊張しました。私たちも一度、武器を持った男達に停車を命じられ、これはダメかと覚悟を決めましたら、覆面をした隊長らしき男が運転席を覗きこんで「栗竹さんじゃないですか」と言うので驚きましたが、派遣隊にいた兵補の班長でした。「武器になるものはありませんか」と言うので何もないと答えましたら、独立のために戦うのだから栗竹さんも一緒に戦ってくれと言われ、「今は任務についているからダメだ。考えておく」と激励して別れました。

またあるときは、夜盗が道路一杯に焚き火をして、車を止めようと待っていました。道がせまくて U ターンできないので100メートルほど手前で車を止め、3人で相談し決死の覚悟で強行突破することにしました。速度をあげ前進して焚き火の直前でギヤを落とし、火の上をバリバリと乗り越しました。燃料に火がついたらどうしようと考える暇もなく、山のような焚き火を蹴散らし、火の粉を飛ばしながら全速力で走りぬけました。泥棒たちもまさか走り抜けるとは思っていなかったのか、驚いて逃げ惑い私たちも懸命に逃げました。しかし、スローになったとき3名ばかり飛び乗ってきましたが、警備に乗っていた地方課の剣道の名人西田氏が、持っていた木刀で突き落として事なきを得ました。本当に怖い思いをいたしました。

マリンプン集結も最終集合期限を決められ、刻々と期限が迫るので皆寝る間も惜しんで頑張りました。いよいよ最後の車となったとき、襲撃に備えて4台か5台の隊列をくんでワタンポネに別れを告げることになりました。たしか、湯浅さんが輸送隊長でありました。

いよいよ出発し街を通過していると、師範学校の菅藤先生が歩いているのを見つけました。 驚いて「先生、これが最後の車だよ」と声をかけますと、「全然連絡がなかった」とのことで大 急ぎで荷物をまとめ、車に乗ってもらいました。もし道で行き会わなかったら先生は大変な事 になるところでした。 途中、中華料理屋の前をとおりましたら、家を取り壊して新築中でした。あの家も私たちのおかげで大儲けしたのだから良いことをした気分でしたが、敗戦国日本に帰ってもあのような贅沢な中華料理は食べられないだろうと、すこし寂しくなりました。もう二度と見ることができないであろうワタンポネの街に別れを告げまして隊列は進みました。沿道には顔見知りの人たちが見送ってくれ、「トアンカチャマタ」と声をかけてくれたり、果物やゴゴス(インドネシアのちまき)などを車にのせてくれる者もいました。

当時のトラックは日産自動車戦時決戦号といわれた車で、運転席は木造でシートも木のベンチ、少し走るとお尻が痛くなり長いドライブでは体がミシミシいう代物でした。それに散々酷使したのでタイヤもボロボロで、すぐにパンクするので1時間ごとに停車してパンクの修理でした。辛かったのは修理後の空気入れで、これは今思い出しただけでも息が切れるような辛い仕事でした。

マリンプン収容所

途中何回も停車して、翌日午前中にマリンプンの草原に到着しました。先発の設営隊のおかげで宿舎はほとんど出来上がっていました。私たちの宿舎は民政部職員の入る第八群12棟に決まりまして荷物を置きました。民政部職員はマリンプンとベンテン地区に別れ、主計課の皆さんも二手に別れてしまいました。12棟は一番外れで課長クラスの偉い人ばかりでしたが、小笠原課長はじめ湯浅さん、斉藤さんその他親しい人が多く、気は楽でした。

課長クラスその他高等官の方は、宿営委員会という「『生活運営のための連絡機関の何かと 仕事を任命され、それ以外の人は階級の区別なく当番を決めて使役の仕事につきました。

私も道路の整備やその他の使役にでかけましたが、マンデー(水浴)の水には困りました。 土地がわるく火山灰か石灰岩のような土地で、井戸を掘ってもでてくるには白い水です。マン デーをすると体が白粉を塗ったみたいに白くなり、乾くと粉っぽくなりまして弱りました。

そのうち、進駐軍がオーストラリア軍から英印軍に変わりました。時折の使役などに出ますとターバンを巻いたインド人の兵隊さんが監視についてきます。彼等はとても親日的で道路工事などをしていると「暑いから木陰に入って休め」と命じ、自身いドラム缶の上にあがって我々を見張るのではなく、オートバイで巡察にくる将校を見張っていて、オートバイがくるとドラム缶をガンガンと叩いて合図し、作業をするふりをさせませた。インドネシアの農民がバナナやパイヤなどを担いで通りかかると、インドネシア住民とわれわれは直接接触するのを禁止されていたので着ているシャツを脱いで果物と交換してくれと見張りの兵隊に頼むと、「シャツはいいから」と農民のところへ行き、銃剣でおどして農民を追い払い、残された果物を担いできて皆に食べさせたりしていました。

「日本は必ず近い将来にアジアの指導者となりインドとは兄弟だ」といっており、英語の話せる人がいるといつまでも話し込んで作業はまったく進みませんでした。

抑留とはいえマリンプンの生活は規則正しく規律も守られ、電気など引かれて生活基盤も次 第に整備され、医療も当時一流の医師の定期健診や診察など万全を期し、また、演芸会や映画 の上映、各専門家の学術講演、相撲その他のスポーツ大会などいろいろなイベントが行われて、 後に話に聞くシベリア抑留者の悲劇などと比べると天地の違いがありました。

宿営委員会食料配給班

ある日、朝礼のあと小笠原課長に呼び止められ、「委員会の中に食料配給班というのがあるから今日からそこに出向するように」と言われました。せっかく楽な仕事ばかりしてきたのに、と少々不満に思いながら配給班の事務所に行きますと、皆さん年配の方ばかりで「ご苦労さん」と迎えいれてくれました。班長は戦前からマカッサルにありました米星産業 KK の社長で岡崎さんといわれ、関西弁で話す人のよさそうな方でした。岡崎さんは若いときから南方に進出しており、オランダ語、英語、インドネシア語のとても上手な方でした。

副班長は三越の子会社で食料品を扱う「二幸」の南方総支配人の服部さんで、この人との出会いが私の戦後の運命を決めました。あと司令部主計課から出向してきた小日向兵曹長と山形兵曹がおられました。この二人は主計のベテランで軍艦にも乗っていた歴戦の勇士であり、何でも知っている頼りになる方でした。司令部からもう一人、トラちゃんと呼ばれている若い上等水兵が来ておりまして、この人がよく働き上官二人の手足のごとく動くので感心しました。その他、各群から当番で使役の人たちが毎日7,8人きていました。

服部さんが私の名前の章二を見て、章魚(たこ)と同じだと「タコちゃん、タコちゃん」と呼ぶのでとうとう私の呼び名はタコちゃんになってしまい、小笠原さんも最近亡くなるまで私のことは「タコちゃん」でした。皆さん若い私をとても可愛がって下さり特に山形兵曹は弟のように面倒をみてくださり、いろいろ教えていただきました。

配給班の仕事は、陸海軍、軍属、 般邦人すべての抑留人員に対する食料配給の公平と監視が主な仕事で、不正な人員申告がないか、物品の授受は適正に行われているかをチェックするいわば配給のお目付け役でした。毎月はじめに英印軍の司令部に前月の食料の配給状況とカロリーの計算書を届ける仕事がありました。書類は全部本部で作ってくれまして、それを受け取り、英印軍に届けるのが私の仕事でした。

マリンプンからベンテンまで交通車に乗り、本部で英文の書類を受け取って進駐軍の司令部に持っていきました。司令部の主計課の士官は全員女性士官で、金髪のたしか中佐くらいの人が先任士官で、同じマリンプンに抑留されている画伯が描いた浮世絵風の春画をお土産にもっていくととても喜んで、ろくに書類も見ずにサインをしてくれ、帰りにレーションをお駄賃にくれました。このレーションを見たとき、これでは戦争に敗けるはずだと思いました。レーションは四角い箱に入った携帯口糧で、主食から副食、コーヒー、ガムその他全部そろっていて、箱も油紙で最後は燃料として使えるなど至れり尽くせりで感心しました。とてもおいしく高カロリーでビタミン剤まで入っていて、日本の乾パンだけの携帯口糧とは大違いでした。しかし、帰る途中で検問所があり、身体検査でこのレーションを見つけられました。その入手経路をしつこく聞かれましたが、通訳にこの次からはサインをもらってくるようにと言われまして、次回からは大いばりで持ち帰りました。

司令部からの帰りにはベンテンの病院に寄りまして、臨時看護婦として勤務している藤野さんや田崎さん、その他民政部の理事生の皆さんと会うのが楽しみでした。藤野さんはいつも大忙しでろくに話もできませんでしたが、田崎さんやウスベーこと臼井さんは薬局の秋山薬剤軍 医のところにいたので、おみやげに現地製のポマードや時には消毒用アルコールで作ったウイスキーなどを貰うのがとても楽しみでした。

配給班の小日向兵曹長と山形さんは天才的頭脳の持ち主で、その場にあるもので応用して 色々な物を作りました。また応用料理の名人で、缶詰を利用して炊き込みご飯やチャーハンな どすぐにつくり、その才能は驚くほどでした。 配給班は群のほぼ中央にありまして倉庫と宿舎兼事務所があり、私以外は全員泊り込みで炊事はトラちゃんが山形兵曹の指示で作っておりました。私は昼食だけここで食べることになっていましたがとても美味しくて夜食まで食べて帰りました。宿舎の連中は、私の分の食料が皆さんに渡るので喜んでいました。

山形さんは物資調達の名人でした。抑留日本人はインドネシア人との接触を禁じられておりましたが、特別なルートがあるらしく配給班の宿舎には何でもありまして、鶏まで飼い、しまいにはヤギまで飼ってミルクが絞れるようになり、よくミルクコーヒーを作ってくれました。また、空のドラム缶とヤシ殻を利用して浄水器をつくり、とてもきれいな水を作りました。班長の提案で各群にその作り方の指導に行き喜ばれました。

使役の皆さんが配給班の作業に喜んで来たがるのは、3時に山形兵曹とトラちゃんが作って くれるおやつの魅力もあっただろうと思います。ときには各群の炊事場でお釜のおこげを貰い、 グラメラ(ヤシ砂糖)を加えてオコシを作ってくれました。そのおいしかったこと、使役当番 のみなさんがとても大事そうに食べておりましたのが思い出されます。

配給品として食油はとても重要な品目ですが、この配給品のなかに私が以前播公司から仕入れた落花生油があり、とても高かったですが買っておいてよかったと思いました。

マリンプンの食生活は各群で大きな開きがあり、配給で各群を回って見てその格差はひどいと思いました。

いちばん良かったのは実業団の商社関係で、その次が地元の司令部・民政部をはじめとした地元部隊、最も惨めなのは何ももたずに来た陸軍の撤退部隊でした。地元の部隊はなにがしかの持ち込み品や私物もありますが、陸軍部隊は何もなく食事も配給品だけでした。

配給の分量も一応は充分といかないが、白米は一人当310gの割り当てがあり空腹をまかなえる分量とカロリーは支給されておりましたが、陸軍は海軍とちがい上下の差別がひどくて、海軍のように「一艦一家」、「艦長は父親部下は子供」の精神がなく、聞いた話では上官たちは部下の食料をピンハネして腹いっぱい食べ、部下たちはときには日に2食で常にひもじい日常だったということでした。班長の岡崎さんが連絡会議のときに「配給には公平を期し、全員に行き渡るようになっているのに、一部でそのような事実があるのは民主主義に反する」と改善を申し入れましたが、われわれ配給班は決められた分量を各群炊事場の受領責任者まで届けるのが仕事で、それから先は各群にまかせてあるのでそれ以上の介入はできません。陸軍と海軍の組織の差を痛感し、ひもじい思いをしている兵士たちに同情いたし、たらふく食べている上官たちをすごく憎みました。

陸軍部隊のひどい事例としてある日こんなことがありました。お米の配給で山形兵曹と私が 上乗りして配りましたが、最後に到着した群ではトラックの荷台にこぼれたお米の取り合いで 血を見る大喧嘩がありました。仲裁に入った山形さんがケガをする始末で、これはなんとかし なければということで山形さんの提案で荷台に竹製のマーコを置きまして、こぼれたお米が掃 き寄せられないようにしました。最後の群でこぼれたお米をあてにしている人たりにはとても 気の毒でしたが、危険防止のために処置いたしました。

その結果、配給のあと倉庫に戻りトラックを掃除しますと、結構たくさんの砂・小砂利まじりのお米が残りました。それを運転手と使役の人達にコップに山盛り一杯ずつ分けて、砂が多い残り米をバケツに貯めました。

こんな砂だらけの米をどうするのかと思っていましたら、山形さんはまず大きな丸いザルでゴミを取り、次に砂利・砂まじりのお米を袋にいれて振りますと小石が袋の底にたまります。 小石を除いたお米をバナナの茎でつくったトイに水と一緒に流すと、米だけがながれて小石が残ります。最後にもう一度ザルで振るいますときれいなお米になりました。このお米と私の大 好きな牛肉人和煮の缶詰で炊き込みご飯を作ってくれまして、食べた残りはおにぎりにして宿舎に持って帰り、主計課の仲間と夜中にソーッと食べました。あまりにおいしいので夢中で食べているとジャリッと砂を噛んでいやな気分になったのも懐かしい思い出で、山形さんの面影・がうかんできます。

山形さんは油の配給のあとの空のドラム缶に残ったドロドロの沈殿物を精製してきれいな食油を作る名人でした。精製の最後の段階でつかう添加剤が何であるのか、何回聞いても笑って教えてくれませんでした。

いまでも思い出すのは、私の誕生日に山形さんがカチャンヒジョウ(青豆)で餡子を作り、 おはぎをたくさん作ってくれまして皆で祝ってくださり、宿舎の人たちの人数分まで作って皆 さんにお土産に持っていくようにとしてくれたことは今でも忘れられません。山形さんはたし か九州の方で、復員後お便りしましたが応答がなく遂に音信不通になったのは残念でした。

また服部さんは、「タコちゃんは帰ってから就職のあてはあるか」と言われ、もちろん「あてはありません」とお答えしたら「よし、お前の面倒は見てやろう」と、復員のときご一緒に大磯のお宅まで連れていかれ、一泊して翌日焼け残った二幸の本社と木挽町の工場に連れて行き、当時三越が北海道の増毛に建設中の水産工場の社員として、しかも三越の正社員としての入社の確約を取ってくださいました。おかげさまで就職難の当時に破格の待遇で三越に就職でき、あの戦後の厳しい状況のもと、楽しい増毛の生活を送ることができました。このご恩は忘れません。

昭和21年5月頃から内地復員の話がではじめまして、やっと帰れるようになったという安堵と帰国後の不安が入り混じった気持ちでしたが、そのうち5月に入って話が具体化してきました。配給班は整理の仕事にはいり、実業団、民政部他マカッサル在住者関係は第一便と決まって慌しい毎日を送りました。在庫食料はできるだけ配給して、残りは復員船に積み込む用意を慌ただしく済ませました。

配給班の宿舎では山形兵曹とトラちゃんがお別れ会の準備に大忙しでした。飼っていたヤギも処分され料理されてしまいましたが、可愛がっていたヤギですから配給班では誰もたべず、宿舎に持って帰って皆さんから大歓声をいただきました。私はメーと啼きながら嬉しそうに寄ってきたヤギの姿を思い出して、遂に食べられませんでした。

私が配給班に出向したおかげで良い思いをしたことは一切口に出さず内緒の話で、ときどき 山形さんはじめ配給班の皆さんの好意で宿舎の皆さんにお土産を持って帰れることと、私の食 事の分を皆さんに食べてもらえることで良心の呵責に耐えました。

いよいよ配給班の解散も決まり、残品を整理して各群に公平にわたるように配分を致しました。それでも半端なものが残りましたので、岡崎さんや服部さんが「タコちゃんはよくやったから宿舎にお土産に持っていきなさい」と言われて南京豆の大袋や青豆、砂糖の半端などを戴いて持って帰り、宿舎の皆さんからとても喜ばれました。

宿舎でご 緒だった僧籍のある今西司政官が手相を観るのが趣味で、ある日私の手相を観て、「栗竹君、君はまれにみる強い運勢の持ち主で、食には不自由しない良い運勢を持っている」と言われたことがありましたが、戦後の食糧難の時代も三越さんのおかげで三度の食事も白米を食べられたし、今までひもじい思いをしたことがありません。今西司政官の手相観があたって本当に有難いことだと感謝しています。また私を配給班に出向させてくださった小笠原さんに深く感謝いたしております。短い期間でしたが懸命に働き皆さんに可愛がられた5ヶ月ばかりの時を今でも懐かしく思い出しております。

復員・引揚げ船

引揚げの話が具体化すると、その準備に忙殺されました。まず私物の整理ですが、兄にジャカルタで貰った黒皮の W の立派なトランクは大きすぎて持って帰ることができず誠に残念ですが破棄することに決め、これも兄に貰ったカーキ色の厚手の服地で手製のリュックを作りました。私物全部を持って帰ることはできず、それにマリンプンから乗船地のパレパレまで夜通し行軍するので、重いと困るので色々品選びには困りました。日本に帰っても何もないと思うので少しでも多く持って帰りたいし、毎日考え考え荷物の入れ替えをしました。

貴金属その他金目の品物は携帯禁止、もし違反するとその班全員の乗船ができないと言われ、皆さん貴重品の整理に苦悩しました。私もヨッピーからもらった 10 ギルダー金貨をどうしても持って帰りたいと思い、石鹸に埋め込んでそれを一度使って、見ただけではわからないようにしましたが、レントゲンのようなもので調べられるとデマがとび、出発前夜マリンプンの土の中に埋めました。後でデマとわかり、石鹸なんか何でもなく持って帰れたのにと悔やまれましたが、もしこれがデマでなくほんとにレントゲン検査が行われていたら皆さんに大変な迷惑がかかり取り返しのつかないことになったと思えば、あの選択はしかたのないものであったと、ヨッピーに心の中で詫びております。

いよいよ出発という日、私は以前患った三日熱マラリアが再発し、熱をだして激しい悪寒に襲われました。私は時間がたてば大丈夫だと言ったのですが皆さんが心配して手配して下さり、病人が乗るトラックに乗せてくれました。トラックで明け方パレパレ近くの臨時収容所に到着いたしましたら、また悪寒が出て皆さんが押さえつけて震えを鎮めてくれました。これはえらいことになってしまった、船の中で再発したらどうしようかと不安になっていましたら、駐在のドクターが「これを持っていきなさい」と貴重品のキニーネの糖衣錠100錠入りの瓶を下さいました。驚いてドクターの顔を見ると、以前お世話になったマカッサル病院の内科の先生で、私の顔を覚えていてくださり本当に助かりました。(この薬のおかげで内地に帰ってからもどんなに助かったかわかりません。)

引揚げ船はリバティー船で、荷物の検査などなく無事に乗船いたし、パレパレをあとにしました。航海は順調でフィリピン神をとおり一路内地へと向かいました。船内には暑くて居れないので皆甲板に出て船とならんで泳ぐイルカを見たり、馴染みのみなさんと色々な話をしたりしてあまり退屈はしませんでした。

食事はお粗木で、十分な食料を積み込んだはずなのに一度も支給されず、しまいには抗議してやっと青豆のお汁粉が一度だけ出てきました。パレパレで積み込んだ沢山の米、砂糖、缶詰などは後で聞くところによると船員達が横領して、日本に到着後ヤミに流して大儲けしたとのことでした。我々としては運んでもらっているという弱みもありますがほんとに残念なことでした。しかし、命からがら帰ってこる人達が持参した食料を横取りするとは全くひどい話で、悪いやつらだと憤りを感じましたが、彼等の言い分は、船員は戦時中にゴミのように使い捨てられたのだから生き残った今はこれくらいの余禄はあたりまえではないかとのことでした。これも戦争が引き起こした悲劇のひとつでしょうか。

引揚げ船の中ではトラブルも沢山ありましたが、嫌な思い出は忘れることにして楽しいことだけ書きますと、いちど演芸会がありまして藤山一郎楽団の方々が音楽を聞かせてくださり、帰国後の不安をわすれて楽しみました。船中では皆さん帰国後の住所の交換などしていましたが、私は深川の家が3月10日の空襲で壊滅したのをニュースで知っておりましたし家族の安否も不明だったので、いちおう前住所を皆さんにお知らせいたしました。

5月21日、船は名古屋の三菱重エドックの岸壁に到着しました。その爆撃による破壊のものすごいこと、全くの壊滅状態で息をのみました。上陸して早速にシャワーを浴び、頭から DDT をかけられました。その間に荷物の消毒もあり、係員が並べてある荷物に DDT をかけていき、ました。その晩は簡易ベッドに寝ることになりましたが、荷物を調べてみると小物が盗まれておりました。皆さん騒ぎだしましたが犯人の特定はできず泣き寝入りとなりました。私も小さな姪にと持ってきた新しいトランプ、コルゲートのパウダー、LUX の石鹸、兄に貰った新しい皮の財布などが盗られていました。

5月だというのに大きなドームの中の簡易ベッドで寝るのはとても寒く、ガタガタと震えて またマラリアの悪寒が出るのではないかと心配しました。のども痛くなり満足に眠れませんで したがやがて夜が明け、帰宅の準備にかかりました。

留守家族の情報などをみると高尾山の旅館が連絡先になっていて、連絡先があるのだから家 族全滅はないと安心して電報を打ってもらいました。

有効期間は忘れましたが日本全国共通の鉄道切符と、現金300円、森永のキャラメル1個を貰い、東京行きの汽車に乗りました。途中の沿道で人々が日の丸の小旗をふり、「ご苦労様お帰りなさい」と叫んで出迎えてくださいました。踏み切りなどで小さな子供がいると、皆さん涙を流しながらキャラメルの粒を汽車の窓から投げました。わたしも姪がいることを忘れて半分くらい投げ与え、姪のことを思い出してあわてて残りをしまいました。

帰りは服部さんも一緒で、その後の経緯は前述したとおりであります。

(2)終わり

エチオピアについて(その5)

石野 赫

エチオピアは、他のブラック・アフリカと比べますと文化がかなり違っています。

まず、独自の文字を持っています。他のブラック・アフリカの民族は持っていません。植民地時代に旧宗主国から取り入れたアルファベットを利用し自国語を標記しています。

インドネシアでは、日本の51音字「アイウエオ」にあたる20音字がジャワ語の「ハナチャラカ」にあり、その他バタックやブキスの文字がありますが、エチオピアのアムハラ語では、「アウイアエエオ」のように微妙に発音が重複している母音があり、語表から勘定しますと182文字があることになります。

字面から見ますと、アラブ語に似ていますが、それとは反対に我々と同じく 左から右へと書いていきますので、ここが違っています。

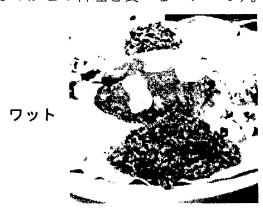
音楽も、哀愁のある歌が多く日本の演歌に似ています。古くから日本の演歌に人気があり、空港の BGM に、北島三郎、八代亜紀等の歌が流れていると聞きます。

ところで、エチオピアの主食は、中近東やインドのナンに似た「インジェラ」です。しかし、原料はまったく違い、蕎麦に似た「テフ」という穀物から作ります。酸っぱく、複雑な臭いがする薄いパンで、普通巻いてあります。



インジェラ

このインジェラを適当にちぎり、これでユーホキャッチャーのように、おもむろにワットを鷲掴みにし、それを口に運ぶのがこの料理を食べるマナーです。



このワットと呼ばれるのは、煮込み料理で、牛肉、羊肉、鶏、卵、野菜等様々な種類があります。どれにも赤く染まるくらいたっぷりと香辛料が入っており、非常に辛いものです。インドネシアのパダン料理やミナハサのウオクよりも、頭を熱くさせる料理です。この辛さと、酸っぱ味、肉の脂肪分が絡みあって「ア

東京には、エヂオピア料理店が3軒あり、ご帰国のおりには、この「インジェラ&ワット」の料理を楽しんで頂ければと存じます。

フリカでは最も洗練された味」と言われております。一度お試しあれ。

ご参考までに、エチオピア料理店の所在を下記致します。

◎クイーン・シェーバ	東京都目黒区東山 1-3-1	03-3794-1801
	ネオアージュ中目黒 B1	
◎サファリ・アフリカン	東京都港区赤坂 3-13-1	03-5571-5854
	ベルズ赤坂 F2	
◎アジス・レストラン	東京都目黒区中根 2-3-15	03-6421-4302
	KI ビル F2	

次回へ

まぼろしの滑走路をたずねて

NPO マナドネットジャパン 坂本 裕保

シダテはどこ?

太平洋戦争当時のスラウェシでの兵士の行動を通して現地の風習・文化を記した「セレベス戦記」なる個人戦史本がある。

京都帝人から学徒出陣、少尉としてハルマヘラ島に赴任、マナドへ転戦の後、命令を受けマカッサルまでの三千キロの彷徨を体験した奥村明氏が、当時の自分が残した記録と文献を合わせ作成した体験記録である。

私は個人的にこの本に興味を持ち、時間あるごとに彼等が行軍した地方を訪ねていた。 ある日、インターネットで太平洋戦争当時のアメリカ軍の資料写真を目にした。その中で 私は「SIDATE」という地名の旧日本軍の隠れ飛行場に興味を引かれた。

「シダテ」または「シダト」がどこをさしているのか。米軍が保管している記録の経度 緯度を頼りに探したものの見当たらない。どこで聞いても SIDATE の名は分からなかった。

一時は現在のサムラトランギ空港かとも思い調査したものだった。グーグルアースでは、1942 年当時のカウィラン飛行場の跡がわずかではあるがシルエットとして見られるが、もちろんこれではない。(*カウィラン飛行場=昭和 17 年 1 月、堀内落下傘部隊が降下急襲したオランダ軍の飛行場)

日系人訪問

ある日、アムランの病院に働いている日系人を訪ねる機会があった。彼女は終戦の年昭和 20 年に日本兵と現地の娘の子として生まれ、御年 65 歳である。

父親は終戦で日本に送還され、母親のクララさんは娘を育てることを唯一の生き甲斐にして、再婚もせず82歳で亡くなる寸前までその兵士を待ったのであった。カロラン病院を建てた田村医師の尽力で元兵士と連絡がつき、病床のクララさんは60年ぶりに涙の再会を果たした。クララさんはその2ヶ月後安心したかのようにこの世を去った。

私は再会の挨拶もそこそこに、当時のマナドの状況、日本人の動向など尋ねてみた。 彼女の母親(クララさん)の父親も日本人で、名前は笠間さんであること、祖父である 笠間さんはサンゲル島への販売代金集金の帰りに船中で毒殺され、マナドの日本人墓地に 埋葬されているという。 しかし私が、マナドの日本人墓地はビトゥンへ移されたことを伝えると、初めて知ったと悲しそうな顔をしていた。また、彼女は多くの残された日本人の子供のことを知っており、それには驚かされた。

このときの彼女との話の中で、思いがけないことながら「シダテ」の名前が出てきて驚・いた。早速、彼女に同行をおねがいしてシダテまで行くことになった。

シダテ発見

アムランから西に向かう道路は道幅も広く、気分的にも余裕をもって走れる。12 キロほど走ると、右側にダンプの人り口らしい道がある。そこへ入ると、道は埃のたつ悪路となり車をゆっくり走らせた。

まもなく視界がひらけて目の前に発電所の工事現場が現れた。港も含めた大規模な発電所で、その威容に圧倒される。東ジャワのトバン近郊にも同じようなのがあったことを思い出した。トバンの発電所は日本の ODA で 1990 年代に建設されたが、その後の経済危機で運営が難しくなり、日揮社の職員が施設の維持管理のためだけに駐在していた。その後どうなったでしょうか。

発電所工事現場の塀に沿って海岸の方向へ進むと、ヤシの木が全く生えていない(セレベスらしくない)風景が現れた。日本軍の飛行場跡である。

「あった!」

無くしたものを探し出したような感動に似ていた。

「セレベス戦記」によると、この飛行場は米軍に見つからないように隠し滑走路だけ建設したがすぐに見つかって爆撃の対象となり、かなりのダメージを受けたらしい。奥村小隊の行軍の際もここで爆撃に遭い命拾いしている。

滑走路は3条もあり、奥村小隊は行軍の際この飛行場を横断するのだが、その幅は5キロもあったという。これだけの施設を連合軍が見逃すはずもなく、日本軍の考えの甘さを示しているようでもある。

いま目にする滑走路の跡は、真平らであるのはよくわかるが境界線ははっきりしない。 その東端かと思われるあたりには温泉が湧いていて、ゲートがあって料金を徴収していた。 その向こう側の海岸にはお湯の湧き出す砂地と千畳敷がひろがっている。

渚に湧き出る温泉は、当時の兵士にくつろぎの場所となったと思うが、セレベス戦記に この温泉のことは記されていない。行軍の途中でそれどころはでなかったのだろうか。

行軍中の奥村小隊は、昼間は敵の空襲を恐れて待機し、夜間の行軍をおこなった。食料

もマリサまではロダ(牛車)を使って運べたが、マリサからはあとの食料として一入当たり 20 日分だけの食料配給ということになった。それはマカッサルまでの 1500 キロは食料のあてのない死の行軍となることを示唆していた。それでも奥村少尉は途中の人家からの略奪を厳しく禁止していたので食料調達に苦労し、病人も続出して行軍に支障をきたしている。

奥村小隊は行軍の途中 8 月 22 日に南セレベスのマサンバで敗戦を知り、その後収容されたマリンプン捕虜収容所(マカッサル近郊)でも過酷な日に遭う事になった。

北スラウェシは大戦中も直接の戦闘のなかった特異な地域であり、住民の対日感情も非常によい。しかし、歴史に埋もれ、表に出てこない戦争の傷跡があるのも事実である。

この飛行場跡地は、シダテ村モイニット(MOYNIT)にある。

終り

ミナハサの皆さんとの友好交流 顛末

NPO 法人 手火山 川口 博康

皆さんお元気と思います。

このところの日本は素晴らしい天候に恵まれご機嫌な日々です。しかし、明日から急激に 寒くなるとテレビは伝えています。また、インドネシアが恋しくなるシーズンに入ります。

さて、この9月にミナハサのカヌー4隻と操船の為の漁師さん2名、民族楽器のコリンタン1セット(7台)演奏者1名 通訳1名 団長1名 合計5名の皆さんを御前崎に招聘しました。

目的は公式には下記の通りですが個人的には5年間もミナハサの皆さんにお世話になり、 何かお礼は出来ないかと考えていました。その結果が今回の「友好を深める」こととなっ た次第です。

準備期間は一年半も前から行いました。まずこのイベントに必要な資金約 400 万円を集める事からスタートしたわけです。自己資金は会員の年会費 30 万円のみでした。

国・県・市・財団・民間人・会社とあらゆる所に寄附金・補助金のお願い・申請書を出しまくりました。確率は 1/3 と少なかったですね。5 月には見切発車でカヌーの発注・人選に入りました。予算が確定したのは一か月前の 8 月と危ないところでした。女神がついていなかったら自己負担で銀行借入の借金返済でどうなっていたのでしょう。このような報告ではなく資金調達に失敗し、お涙頂戴で皆さんから義捐金をお願いしていたかも一一まあ、何とかやりこなしましたのでその顛末を報告します。

今年の干支は私のうさぎですので何か良い事ありそうなを期待してお正月を迎えます。 手火山で作った鰹節をたっぷりかけてのお雑煮を今から楽しみにしています。 良いお年をお迎え下さい。

AA. カヌーin 御前崎

以下は協力依頼の案内です。

NPO法人手火山は平成22年9月4・5日に御前崎市においてイベント「カヌーin御前崎」を開催します。インドネシア・北スラゥシ州からカヌー4隻を搬入し、カヌーの漁師さん2名と引率者1名を招聘します。以下目的をもってこのイベントを開催します。

皆様の温かいご支援・ご鞭撻を節にお願い申し上げます。

(1) 私ども NPO は友好都市を目的にインドネシア北スラウェシ州の皆さんと交流を行ってい

ます。特にビトン市は昭和の初めから日本との往来が有り漁業の町として発展し今日に至っております。ツナ缶詰・真珠の養殖・鰹節の産地として日本とも交易が盛んに行われてきました。この友好関係を一層深いものに発展させることを願って今後も交流を続けてまいります。

- (2) 御前崎市にある縄文時代の遺跡「星の糞」の住人はカヌーを使って神津島にある黒曜石を求めて海上交易をしていたことが近年池谷信之先生の研究で分かってきました。 御前崎港が縄文時代(6000年前)既に海上交易をしていたことを地域住民・港湾・観光 関係者に知ってもらい御前崎の新しい魅力の一つに加えて頂くことを提案しています。 海から生活の糧を得ていた御前崎の住民にとっては縄文の海上交易は大いに夢をかき立て、誇りを取り戻す機会になると確信しています。
- (3) 北スラウェシ州には南洋の名山・メナード富士があります。

戦前には国策であった「南進」によってこの地に進いした日本人、戦時中は多くの兵隊さん、また戦後は駐在された方達を励まし、郷愁と異国での生活を癒してくれました。

今、静岡県は富士山を世界文化遺産へとの運動が大きく盛り上がっています。このような時にそ世界の富士に関心を持ち、世界から応援をもらってはどうだろうか。両国の富士山を通した友好を前進させたい。

以上の目的を達成する為に、同日に開催される「エコパークまつり」(御前崎地区活性化地域協議会主催)と協働して以下のイベントを行います。

- インドネシアのカヌーの紹介(体験乗船・カヌーについて説明など)
- 2. NPO手火山会員及び御前崎市民との友好関係を深めるための交流会参加
- 3. インドネシアからの研修生・他の国からの研修生との国際交流会に出席
- 4. 御前崎市を理解してもらうために市内施設・名所の視察
- 5. ビトン市で作られた鰹節の流通視察および鰹節工場の視察
- 6. 講演(御前崎は縄文時代に黒曜石を神津島から搬入し海上交易をしていた)

講演者: 池谷 信行先生(沼津市教育委員会文化振興課 主査(学芸員)

日時: 8月29日 15:00

場所: なぶら館(御前崎観光物産会館)

- 7. 今回のイベントを基に将来「カヌー文化」「海人文化ルネッサンス」の輪を広げ、御前崎 の新しい魅力を発掘して行きます。
- 8. 団体・会員からの協賛を得て海に関するイベントを行います。

「エコパークまつり」協賛イベント (御前崎のブルーツーリズムで使う体験学習の披露)

BB.コリンタンを聴く夕べ VISA 申請用に使ったものです。

招へい理由書

平成22年6月28日

在マカッサル出張駐在官事務所長 殿

(1) 招へい目的

現在私共は友好都市締結を目標に国際交流をインドネシア北スラウェシ州の皆さんと行っています。特にビトン市は昭和の初め日本人が設計したと言われており、漁業の町として発展し今に至っております。第二次大戦中は軍港として又昭和の初めから多くの日本人が住み、特に水産業に携わり中でも鰹節の産地として日本とも経済を中にした交流が盛んに行われています。特に御前崎市は古くからカツオ漁が盛んなところで、ビトン市とも多くの人が関わってきました。この友好関係を一層濃いものに発展させることを願って今回のイベント「コリタンを聞く夕べ」(日・イ友好事業)を企画しました。

同時に「カヌーin御前崎」を開催しインドネシアから3名の方を招聘しております。

私共が2009年2月の訪問の際にはHanny Sondakh ビトン市長からは歓迎のパーティに又現地会員からは暖かい現地の踊りなどにも招待されております。この友好関係を一層濃いものに発展させることを願って今回、イベント「カヌーin御前崎」「コリンタンを聞く夕べ」を企画しました。

(2) 招へいの経緯

昨年からイベント「カヌーin御前崎」「コリンタンを聞く夕べ」の計画を進めてまいりました。しかしながら自分たちだけのお金では経費を賄うことが出来ませんでしたので、このイベントの企画書を御前崎市・(財)地域活性化センターに提出したところ審査が通り合計150万円の助成金が承認されましたのでこのイベントの実行が可能となりました。

(3) 申請人との関係

今回の申請人の人選につきましてPT. MEDIA TELEVISI INDONESIA 東京支局長 大川 誠一氏と私共のインドネシア会員であるKORNELIUS SAMUEL KILAPONG さんの紹介とアド バイスによるものです。

色々な方からのアドバイスを頂き何とかVISAを取得することが出来ほっとしていたある日、現地責任者のコールさんからの電話は「漁師一名日本に行くのは家族の反対が強く出来なくなった」との事でした。急遽変わりを探してもらいましたが日本に着くまではびくびくしていました。

何を考えているのか全然分からない・対応のしようがないことです。

5名の内、団長のオデイさんと通訳のコールさんは何回か日本に来ていることから心配はない。他の3名は初めての海外とのこと。

予定より一時間遅れで静岡駅に無事到着。すぐさま御前崎に行き旅の疲れもなんのその カヌーの点検と艤装にかかる。カヌーとコリンタンは20ftのコンテナーでビトン港から ジャカルタ・シンガポール経由にて一カ月かけて御前崎に到着。税関/検疫に立ち会う も税関はレントゲン車を持ってきての税関7名検査。予期してない物々しい雰囲気にど うしたのか恐る恐る尋ねる。

「麻薬が入っているのでは?こんなカヌーを持ってきこのは御前崎開港以来初めてである。何も触ってはいけない静かに立ち会って欲しい」との指示。考えてもいなかった疑惑をもって灼熱の炎天下に汗だくになってのレントゲン検査。何も無く無事にOKを貰った時は力が抜けたね。

木の彫り物には隠しやすいとのこと。職務とは言え御苦労をかけてしまった。

艤装の現場をNHKさん他2社ばかりのTVが取材に来てくれた。これがイベントの当日まで 続き私は正直取材の対応に疲れた。しかし、放映した内容は非常に友好的でありイベン トの格が上がった。

招聘したインドネシアの皆さんも喜んでいた。写真とCD・DVDを沢山お土産に持って行ってもらった。

予算の都合で宿泊は我が家とした。宿泊するお客さんはインドネシア人5名と日本人4名・我々夫婦の係口名、何時もは老夫婦二人だけの生活が急に賑やかになった。風呂の湯はこんな大人数で設計していない。直ぐに無くなってしまった。翌日からはシャワーのみでお願いする。

家内は大変だったと思う。インドネシアのように女中さんは今の日本では無理ですので ーー。これも協力してもらい布団の上げ下げと食事の片づけはお願し、何とか一週間我 が家での生活を無事終了することができました。これも国際交流の一環として大目に見 てもらうしかない。

やはり、漁師さんということもあり一般では食べない刺身も平らげてくれた。 次回も是非日本に来たいと言ってくれた。私も呼びたい。継続は力なり一好きな言葉である。

問題はお金です。無いのはお金だけ。年末ジャンボでも買ってみるか。

カヌーを御前崎の港に浮かべ子供たちを乗船させるだけで港湾施設占用許可申請書を 県に出さなければならないと。民間では御前崎港が開港して初めての申請とのこと。 今回、このように役所に許可をお願いする申請書は多く、へとへとになった。 NPO を立ち上げて以来、事あるごとに役所にお願いする機会が多くなった。お役人の根 性も分かりかけてきた。民間とは目的が違うから仕方ないだろうが腹の立つ事ばかり多 かりしである。

今回のイベントが曲がりなりにも成功と言える範疇であったことは多くの皆さんの協力のお陰と深く感謝しています。特にインドネシアの会員の皆さんには沢山のお力を頂きました。会員の皆さんが参加しなかったらこの様なイベントの成功はなかったと思います。 感謝・ありがとうございました。

CC. 国際交流会の「拳内

平成22年8月吉日 NPO法人手火山 理事長 川口 博康

各 位

拝啓 時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。

当 NPO 法人の運営につきましては、平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。 私共は平成22年9月5日に御前崎市文化会館において国際交流会を開催いたします。

海外からの留学生・研修生・労働者など多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。 皆様の温かいご支援・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

今回、スラウェシ州ミナハサ地区から民族楽器コリンタンを持ち込んでコリンタン演奏の第一人者である SEM JONY LONTOH 氏に来日して頂き御前崎で演奏会を下記の通り 実施することになりました。 多数の皆様のご来場をお待ち申し上げます。

まずはご案内まで。

敬具

日時 平成 22 年 9 月 5 日(日) 1 6 時 3 0 分 ~ 1 7 時 30 分

場所 御前崎市文化会館 ロビー

インドネシア・スラウェシ州民族楽器「コリンタン」を聞く夕べ

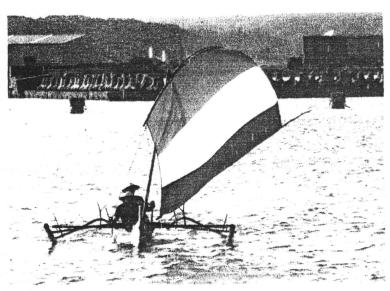
演奏者 SEM JONY LONTOH

日時 平成 22 年 9 月 5 日(日)

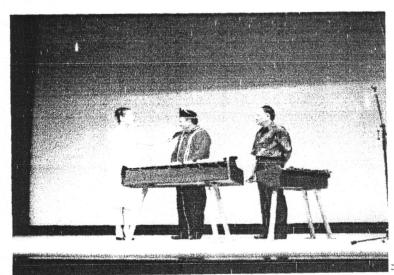
18 時 0 0 分開演 20 時 45 分終演



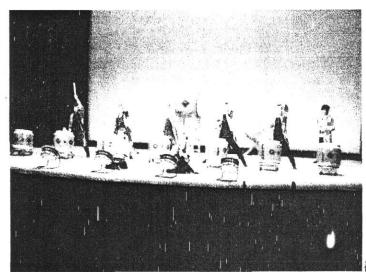
大いに歌うミナハサの友達



御前崎港で見事な帆走を披露



コリンタンで魅了する



歓迎の御前太鼓



大洗町から駆け付けてくれたミナハサの攵



池新田高校による歓迎

昭和51年(1976)であったと思うが、その年しばらくの間、私は郷里池間島(宮古島の一雕島)の漁業組合に勤めていた。ある日、めずらしくヤマト(日本本土)の人が2人、組合事務所を訪ねてきた。朝日新聞社の記者とカメラマンであった。「魚釣島に行きたいが適当な船を世話してください」と言う。7月であったか8月であったか忘れたが、真夏の晴天の日である。島の漁船はほとんど出漁中であったが、港内に2~3隻の小型漁船が残っていた。その中の1隻の船主、勝連(さとし)さんに「ヤマトからのお客さんだが尖閣まで行ってくれないか」と聞くと、ふたつ返事でオーケーしてくれた。「しかし、一人ではきついから君もいっしょに行ってくれ」。

失閣諸島(池間島では「イクン」と呼ぶ)の名は子供のころから聞き馴れていた。その 昔、島の漁師たちは存先の一時期、魚釣島を基地にカツオ釣り漁業 (鰹節の加工も含めて) を行ったとも聞いている。終戦後の一時期は密貿易の拠点としても利用されていたらしく、 「イクンからのお上産だ」と、乾燥うどんや茶碗などの日用品を見た記憶がある。アホウ ドリの卵というのも見た。密貿易は終戦直後のどさくさまぎれの豆台風みたいなもので、 すぐに消えてなくなったが、かつおやまぐろ、その他豊富な水産資源は消えてなくなるも のではなく、「イクンは魚の宝庫」というイメージは頭の中に刷り込まれている。

新聞社のお客さんがきたとき私はすでに 30 歳を超えていたが、まだ尖閣諸島に行ったことがなかった。いちどは行ってみたいと思いながらもいつか機会があるだろうとのんびり構えていた。その機会がいきなり飛び込んできたのだ。

早速、燃料・水・食料など必要な資材を準備して、翌日昼過ぎに池間漁港を出発。勝連 先輩の船は長さ 12M 、幅 2M、総トン数 3 トンの小船で、ふだんは宮古群島周辺の底魚を 釣って生計を立てている。池間島から北西およそ 100 マイル彼方の尖閣諸島まで行って魚 獲りの操業をするには船が小さすぎるが、真夏の平穏な時期にお客さんを二人乗せて行っ て帰ってくるだけなら問題なかろう。勝連さんと私は 3 時間ごとの交代で舵棒を握り、お 客さんは胴の間のハッチの上で適当に寝転がり、周囲 360 度島影ひとつ見えない、夜は星 明かりだけの大洋を、羅針盤ひとつを頼りにトコトコ走った。海上平穏、快適な航海であ った。

翌朝 8 時ごろ前方(北西方)水平線上に魚釣島の頂上が見えた。近づくにつれて魚釣島の手前にある南小島、北小島も見えてきた。(魚釣島は南小島などに比べて島が大きく標高も高い{標高 360m}ので手前にある小島より先に視認される)。10 時ごろ、私たちは南小島に到着し砂浜に上陸した。名前のとおりほんとに小さな島で、人が長期にわたって住めるようなところではない。しかし、海上からは岩だけが突っ立っているように見えたが上陸してみると思ったより広い砂地の広場があった。白い砂地に芝生とハマヒルガオが生えて

いる。このような絶海の孤島でテントを張って二晩くらいのキャンプもいいかも。砂地から屛風のように立ち上がっている岩にもよじ登ってみた。岩のくぼみにいくつか海鳥の巣がみえる。尖閣諸島はその昔アホウドリの繁殖地であったらしいが、台湾の漁師に獲り尽くされて絶滅したと聞いているが、資料を読んでみると初期の開拓者もアホウドリの羽毛・を集めていたとある。岩場の頂上にもせまい平坦地があって草が生えていた。このせまい岩場の上にもアホウドリがひしめいていたのだろうか。アホウドリは羽毛が布団の材料になるので漁師たちに狙われたらしい。漁師たちは今の自分のように岩をよじ登ってきてアホウドリを撲殺したのだろうか、とよけいなことを考えたりした。 南小島のすぐ北となりにある北小島は岩だらけで船を着けられるような砂浜もない。夏のベタ風の海であっても、遠くからくるウネリで海面は1mくらいの幅でゆっくり上下している。ウネリの呼吸にあわせて船の舳先から岩場へ跳び降り、写真を撮って北小島をはなれた。

いよいよめざす魚釣島。南・北両小島から魚釣島まで約6キロ。島の東海岸に接近してから右手(島の北側)の海岸をなめるようにして西海岸に回りこんだ。海岸線は岩場だけで砂浜はみえない。このころから宮古海上保安署の巡視船が1隻、私たちを見張るように1キロほど沖合をゆっくり動いていた。当時の巡視船の役目は主に台湾漁船の侵入を阻止することにあった。台湾漁船の領海侵人、不法上陸にはかなりてこずっていたようで、時々新聞種にもなっていた。しかし、この日は日に見える範囲に台湾漁船も沖縄の漁船も見えず、見える船は白い巡視船1隻だけであった。巡視船の向こう側(魚釣島から北東の方向)には久場島が見えた。久場島は魚釣島から北東25キロの位置にある。

魚釣島の西側に狭い平坦地があって、話に聞いていたとおり鰹節工場跡の石垣が見えた。 工場跡近くの海岸に、明らかに人工とわかる船着場がある。船着場といっても岩場の中に 小船がやっと着けられる程度のスペースを切り開いただけのものである。その小さな「港」 に勝連さんは慎重に船を乗り入れた。

(年表によると福岡県出身の実業家・古賀辰四郎が明治18年(1885)ごろから魚釣島の開発 に着手している。鰹節工場や船着場もそのころに造られたものと思われる。)

早速上陸。新聞記者もカメラマンも張り切ってそれぞれの仕事をこなした。私もやや興奮 気味で工場跡やそこらあたりの海岸を歩きまわった。

岩場に赤くさびたエンジンと木造船の残骸があった。台湾漁船のものらしい

予定の取材を終えて午後4時魚釣島出発。翌日10時宮古島平良港到着。港に待っていたのは平良海上保安署の係官であった。「瀬渡し法(条例?)違反」で勝連さんは起訴され、私は参考人として事情聴取された。そんな法律があったのかとおどろいた。日本復帰直後の沖縄には、特に海上関係にこのようなトラブルが多く、海上保安庁もそれなりに苦労していたと思う。

上記、法令違反の尖閣訪問以後、かつお釣り、底魚釣りなど本式の漁業操業で数回尖閣 海域に行く機会があったが上陸はしていない。

失閣列島はユーラシア大陸から張り出している大陸棚の縁に位置している。大陸棚はその縁から傾斜して徐徐に深くなり「沖縄トラフ」にいたる。この大陸棚に沿って(沖縄トラフの西縁に沿って)黒潮が流れている。ルソン島東方、台湾東方を北上してくる黒潮は西表・石垣島の西、尖閣諸島の東を薩南のほうに流れて行く。そのような地理的事情から、尖閣諸島の周辺は大陸棚(水深は 100~120M)に棲む魚類だけでなく黒潮にのってやってくるカツオマグロカジキなどの絶好の漁場にもなっている。沖縄の漁船だけでなく九州各県の漁船もそれぞれのシーズンの獲物を狙って列島周辺にやってくる。台湾の漁船も来る。そのような好漁場であることに加えて海底の石油資源が豊富にあるとなれば台湾や中国が黙っているわけがない。

1968年の ECAFE による調査で、尖閣諸島付近の海底に膨大な石油資源が眠っているとわかった。台湾(中華民国)と中華人民共和国は相次いで尖閣諸島の領有権を主張しだした。

そのころから日本国内でも尖閣列島の実効支配についての議論が出はじめた。朝日新聞社もそのような空気のなかで取材の必要を感じて記者とカメラマンを派遣してきたにちがいない。

「実効支配」というのは、要するに無人島の状態ではいけない、きちんとした施設を造ってそれを正常に管理する、あるいはそこで生活している住民がいてはじめて実効支配しているということだと思う。理屈をならべているだけ は何にもならない。

尖閣の問題は沖縄の漁民にとっても生活に直結する切実な問題であるから、私自身「実効支配」についてシロウトなりに色々考えてみた。漁民の立場で考えられることと言えば、まず航路標識(灯台)、ヘリポートを含む救難施設、天候が悪化したときのための漁船の緊急避難施設などの建設である。航路標識は航海川灯台だけではなく航空灯台も考えられる。海洋・気象観測所の設立も効果的であろう。しかし日本政府はその気になればすぐにできたことを何もやっていない。建言する者はいただろうが否定しれたのだろう。こと現況に至ったからには民生施設だけでなく軍事用の監視施設なども必要かも知れない。(現在は魚釣島と北小島に正式に灯台(航海用標識)が設けられている。)

片田舎の漁師ごときがそんなことを考えてもどうにもならないが、国会議員の中にも尖閣諸島の領土保全を真剣に考えている人がいたとみえて、灯台を建てたとかそれが政府の方針で壊されたとか新聞種になったりしていた。

尖閣の問題で私が不思議に思うのは、日本政府の「日本と中国の間に領土問題は存在しない」という主張(見解)である。役人特有の表現法かもしれないが。たとえば、ある遊休地をはさんで向かい合っている AB 2 軒の家がる。遊休地は B 家の所有で、そこには無人の番小屋もある。「あの番小屋の前を掘ればきれいな水が出るかもしれない」ということで、ある日役場の者が小屋の前の土地をボーリングしてみたら、豊富な水脈があることが分か

った。家族が多くて水に困っている A 家ではぜひともこの水が欲しい。いきなり B 家にむかって「あの土地も小屋も俺んちのものだ」と言い出した。

このような事態になったときに B 家の主が「あなたと私の間に土地の問題は存在しない」と表明するだけで済むものだろうか。仮に私が無茶をいう方の立場なら、「問題は存在しないのか、どうもありがとう」と、さっそくトウモロコシの種でも蒔いて番犬を 5 匹くらいいれて「実効支配」するだろう。B 家の主が常識的な人間なら、この手の問題が起きたならば、まず家族に向かってコレコレシカジカの問題がおこっていると説明して気を引き締め、対策を協議するだろう。フェンスを設けるなど家族でできる対策をとり、しかるべき筋に申し立て、財産の保全を図ろうとするはずだ。これが国内のできごとならしかるべき筋に届け出て正しい者が勝ち、ということになるだろうが、国と国のトラブルともなれば両者共有の法律はないのだから裁判というわけにもいかない。両方が国際機関とかに延々と正当性を主張して結局は「強い者勝ち」、ということになるだろう。(中国の、チベットはじめ近隣諸国にたいするやり口を見よ)

今回(2010年9月)の尖閣でのトラブルは決して偶発的なトラブルではない。日本国民の中にはこの事件で、中国との間に領土問題をかかえていることに気がついた人も多いと思う。まだ気がつかない人も多いと思う。「領土問題は存在しない」という表現は、「問題ない」ということで国民に誤解を与え、誤った判断に誘導することにもなっていたのではないか。

失閣諸島の領土問題は前述のとおり 1988~89 年から始まっており、中国と台湾、特に中国は着々と布石して、ついに昨年9月に漁船による領海侵犯・不法操業、巡視船への体当たりという「実力行使」の事態に至った。今回の事件は問題の始まりではなく、また終わりでもない。豊富な水産資源、海底資源、そして東シナ海の制海権もからんで、中国が失閣諸島の領有をあきらめるはずがない。この際、日本国民は日本と中国の間には領土問題が存在して紛争まで起きていることをはっきり認識すべきである。政府はこの状況を率直に国民に知らせなければならない。都合の悪いこと、あるいは国民に公表すべき大事な案件を国民の目から隠そうとするのが昔からの日本国(の指導者層)の体質のようであるが、そのような体質はもういいかげんにこのへんで「改善」したらよいと思う。尖閣諸島の事案は政府、国民一体となって、フンドシを締めなおして掛かるべき案件ではないか。

尖閣諸島メモ

所在地 :: 東シナ海

所属する島: 魚釣島、久場島、大正島、南小島、北小島の5島

所有者: 大正島は国有地。魚釣島、久場島、南小島、北小島は私有地を国が借

り上げている。日本人は立ち入り禁止。

先日、タルシウス今号への坂本さんの投稿原稿を読んだのがきっかけで、アムランに住む日系三世のオンダンさんを訪ねました。当の坂本さんがタイミングよく日本からやってきたので案内してもらいました。

ビトゥンから車で約3時間、アムランの市街地の西側にオンダンさんの家がありました。 終戦の翌年(昭和21年)生まれのおばあさんはまだ元気で快活な女性です。 その部屋から写真の東を持ち出してきて、いっぱい話してくれました。

祖父の笠間さんの名は哲治。福井県出身。メナドで材木商。娘のクララさん(オンダンさんの母親)が4歳のとき、商用(集金)でタウナ(サンキル島)へ行き、毒をもられて死んだ。没年1922年(大正11年)。墓はメナドの WAONOSA 墓地(通称オラング墓地)にあった。(現在はビトゥンの日本人墓地)

クララさんは終戦間際にビトゥンの東インド水産の職員・坂上次郎さんと結婚。翌年 オンダンさんが生まれた。生まれて4ヶ月目に坂上さんが日本に引き揚げることになり クララさんも娘も一緒に日本に行くことになっていた。ところが引き揚げ船の出港が急 に決まって(繰り上げ出港になったか?)、坂上さんはクララさんを捜したが、クララ さんは外出していて(教会にお祈りに行っていたらしい)見つからず、やむをえず母娘 を残して出発した。置き去りにされた形のクララさんは三日三晩泣き明かした。

日本に引き揚げた坂上さんは長い間音信不通であったが、アムランの田村医師の尽力でやっと連絡がとれた。 坂上さんは大阪でラーメン屋の従業員として働いた後に独立、事業がうまくいって経済的にも余裕ができていた。クララさんが存命中にアムランまで2回来た。

(クララさんと坂上さんの再会の写真もいくつか見せてもらいましたが、お二人とも本当に幸せ上杯という表情で、こちらまで胸が熱くなりました)

オンダンさんは子供3名。上の二人は田村医師の紹介で病院勤め(事務職)、末子(女子)はフィリピンの大学を卒業して現在アムランの高校で英語の先生をしている。子供たちは皆近くに住んでいておばあちゃんは幸せだ、ということでした。

クララさんは再婚もせずに母子家庭で苦労したに違いありませんが、最終的には坂上さんと連絡がとれて人生の最後のわずかな期間だけですが幸せに浸ったことでしょう。終わりよければ全てよし。よかったですね。

しかし、ミナハサにいっぱいいる日系人家族の中には、社会の底辺でもがいているような家族もあるようです。機会があればレポートしたいと思います。 (終)

会員動向

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく。 昨年(平成22年)の本会会員の動きは概略以下のとおりでした。

1.5月から6月にかけて工藤さん(交流基金・日本語教師)、太原さん(JICA・日本語教師)、松本さん(JICA・指圧教師)、若林さん(JICA・日本語教師)が任期満了となって帰国しました。

後任として北条さん(JICA・日本語教師)、小山さん(JICA・日本語教師・)が着任、 人会いたしました。

先生方の帰国者と着任された方の数が合わないのは政府の予算削減のせいかと思われます。どんどん存在感が薄くなっていくわが日本国ですが、われわれ北スラウェシ日本人会は逆に一層の隆盛発展を期したいと思います。

- 2. JICA 派遣の曽我さん(中学校理科教師)も12月末をもって任期満了となりました。 曽我さんは会員の柴田さんと相思相愛の仲となり、過日、バリ島にて華燭の典を挙げられました。任期満了の手続き上一旦は帰国しますが、直ちに舞い戻ってくるそうです。 若い二人の前途を祝します。
- 3. メナドの海のプリンセス・勝見恵理ちゃんは引き抜かれてバリに移りました。さびしくなりましたが会員籍はそのままです。ときどき帰ってきてください。
- 4. 永田修司さん、遠矢義美さん、川原靖朗さんが入会されました。それぞれすでにインドネシア滞在歴は長く、奥様も子供さんもそろっています。どうぞよろしく。
- 5. 真珠業界も日本大不況の影響で状況がきびしいようです。堀口真珠は養殖場経営から 手を引き、は帰国しました。施設は榎本さんが引き継いで新しい経営体で再スタート するようです。事業の発展に期待しています。
- 5. 真珠の今泉さんの奥様がこのたびメナド市内で車販売の事業を開始しました。皆様の ご支援を御願い致します。(詳細は広告のページをどうぞ)
- * 巻末の会員名簿にはあえて会員個々の電話番号などは記載していません。連絡先を知りたい方は平野幹事長にお問い合わせください。(08124300620 平野)

以上

編集後記

平成23年新年号巻頭のご挨拶は広島の大之木さんです。

前号に引き続いて栗竹章二さんの手記を掲載しました。原稿を読みながら感じたことですが、栗竹さんご本人は性格的に率直、楽天的で人に好かれるお人柄のようで、そのような人柄が敗戦前後のどさくさの中にあっても「幸運・僥倖」をよびこんでいたのではないでしょうか。食に困らないのは「手相」のせいだけではなさそうです。

すでに読まれた方もいると思いますが「セレベス戦記」という優れた手記があります。 京都帝大から陸軍幹部候補生学校を経て陸軍士官となった奥村明氏の手記です。この二つ の手記を対比しながら読んで考えさせられました。

片や在マカッサル海軍民政部勤務の若い書記生、片やハルマへラ島から転進(脱出?)してビトゥンに上陸した陸軍部隊の小隊長。両者とも最終的にはマリンプンの捕虜収容所に収まるのですが、収容所に至るまでの経緯も収容所での生活も(同じセレベス島内のことで時間的にも重なっていながら)まるっきり天国と地獄ほどの違いがあったようです。奥村小隊はほとんど飢死寸前でマリンプンに到着し、収容所での生活も飢えとの戦いであったそうです。陸軍の野戦部隊と海軍の民生部の違いはありますが、栗竹さんの周辺は本文のとおりで、敗戦直後に中華料理屋で連日の宴会です。(「セレベス戦記」はインターネットで読めます。)

茨城の坂本さんはその奥村小隊の足跡をたどって「シダテ村」を見つけた経緯を綴ってくれました。実は去った2005年にメナドの通称オランダ墓地にあった日本人墓をビトゥンの日本人墓地に移す際、「笠」の一字しか読み取れない墓碑があって、氏名不詳のままビトゥンの墓地に移葬しました。(歿年月は大正10年と読み取れた)。以後、調べるすべもなくそのままになっていましたが、今回の坂本さんつ文章によって墓碑の主が笠間姓であること、そのお係さんがアムランに住んでいることが分かった次第です。タイミングよく坂本さんがメナド入りされたので、案内してもらって笠間さんの孫にあたるオンダンさんに会ってきました。おじいさんの笠間哲治さんは、メナドを拠点に材木商をしていたそうです。その娘のクララさんと東インド水産職員の坂上次郎さんの間に生まれたのがオンダンさん、ということです。

東京の石野さんはエチオピア便りです。料理の写真は色()き、香り付きで送られてきましたが、本誌ではコピーの都合で色も香りも抜けました。ごめんなさい。皆さん東京に寄る機会があったらエチオピア料理も試してください。

川口さんは日本・北スラウェシを結ぶ架橋工事(文化交流事業)に励んでいます。現地 に住む我々もできることがあればお手伝いしたいと思います。

昨年の日本における最もホットな出来事は尖閣諸島久場島沖の中国漁船による「体当たり」事件でしょう。この事件は日本政府としては晴天の霹靂であったようですが、中国政府としては想定内、というよりもインプット済みのプログラムの一部でしょう。事後の対

応をみても、高段者対ド素人の囲碁試合の観があります。(試合にもならないか)。次の一手はどうくるか、とのんきなことを言っている場合ではありません。沖縄の漁民を代表して長崎さんが一筆したためました。どうぞ読んでください。

表紙はいつものとおり羽根井さんです。

次号は7月発行の予定です。現地在住会員もがんばって原稿を提出してください。

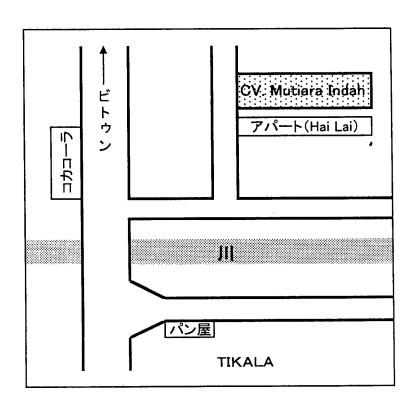
CV. MUTIARA INDAH

中古車販売

中古車買取

Address Jl. Pingkan Matindas Lingkungan 1 Dengdengan Dalam Tikala Kota MANADO

Tel 08124309843 (今泉) 081244034750 (ポウラ)



会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。 (2014年 04月 20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- ●会報タルシウス(製本版)には従来通り名簿は掲載されます。
- ●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。 (2014年 04月 20日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

- ●会報タルシウス(製本版)には従来通り名簿は掲載されます。
- ●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

ビトウン日本人墓地収容墓碑(2010年12月2日現在)

	氏 名	歿 年 月	日		享 年	備考	夸	
1.	与那嶺 亨	昭和 15年	9月	1 20 日		渡嘉敷村		
2.	伊礼良貞	14	3	28		石垣市新川	11	•
3.	伊礼徳 一	14	6	29		伊礼良貞の	の子	
4.	並里三雄	12	11	2	26 歳	伊江町		
5 .	比嘉松樽	9	9	29	29 歳	渡名喜村		
6.	池田増蔵	14	12	13	36 歳	伊平屋村		
7.	古波蔵 清吉	13	1	29		伊平屋村	†	
8.	池原盛益	14	12	8	30 歳	那覇市泊		
9.	高良三郎	17	7	28	44 歳	那覇市小	禄	
10.	祖慶朝順	12	8	18				
11.	田端並正	14	8	28				
12.	仲宗根 勇	11	10	4	1			
13.	新垣健一	19	3	13				
14.	出盛康子	14	1	14	父親は八	重山黒島出身	身出盛康儀	
15.	氏名不詳							
16.	仲村渠 蒲	20	2	20		座間味村。	海軍軍属	
17.	渡久地 平則	20	5	29		本部町。	海軍軍属	
18.	与那嶺 三郎	11	2	12		渡嘉敷村		
19.	古波蔵 鑑徳	20	5	29		渡嘉敷村	海軍軍属	
20.	翁長武治	20	1	3		座間味村	海軍軍属	
21.	増田誠吉	20	5	29		東京都	海軍軍属	
22.	岩 手 常	20	3	9				
23.	加来 俊太郎	6	10	28	46 歳			
24.	加来秀子	3	8	4	46 歳			
25.	中 村 靖子	20	8	7				
26.	笠 (間)	大正 10	3					
27.	大機現成嬰子	(戒名)昭和	8	4				
28.	奥田 甚三郎	11	4	12				
29.	山城幸夫							
30.	氏名不詳							
31.	知念仙時	昭和 20	1		· 47 歳	本部町	海軍軍属(戦
死)								